

特別セミナー報告

特別セミナー「対話と共存を妨げるものはなにか」

平成21年7月23日(木) 筑波大学中央図書館集会室において、筑波大学主催、北アフリカ研究センター及び人文社会科学研究所インターファカルティ教育研究イニシアティブ(IFERI)共催による特別セミナー「対話と共存を妨げるものはなにか」が開催された。講師には、ヤコブ・ラブキン(Yakov M. Rabkin)氏(モントリオール大学教授)と板垣雄三氏(東京大学名誉教授)を招聘し、国際社会における諸宗教共同体の共存と対立についてご講演いただき、本学教員・学生とも広く意見交換をする場を設けることができた。ラブキン教授は歴史学・国際関係論・科学史が専門だが、イスラエル・シオニズム批判を展開する現代ユダヤ教学者として世界的に有名であり、シオニズムの歴史を論じた *A Threat from Within: A Century of Jewish Opposition to Zionism* (Fernwood: Zeb books, 2006, 原著はフランス語で2004年に出版)は2006年にカナダ総督賞を受賞した。板垣名誉教授は、我が国の中東・パレスティナ問題研究の第一人者である。

同セミナーは、本学塩尻和子副学長(国際担当)の開会の辞で幕が開き、第I部と第II部の二部構成で実施された。講演会の参加者は、約20名であった。第I部では、まず、板垣教授に「パレスティナ・イスラエル問題の将来：日本人にとっての問題(The Future of Palestine/Israel Question: a Problematic for Japanese People)」についてご講演いただいた。引き続き、ラブキン教授より、「ユダヤ人とイスラーム教徒：紛争の種か協力への兆しか(Jews and Muslims: a Source of Conflict or a Promise of Collaboration?)」についてご講演いただいた。(なお第I部の講演・コメントはすべて英語で行われた。)

第I部 講演・コメント

講演I：板垣雄三 東京大学名誉教授 The future of Palestine / Israel Question: a Problematic for Japanese People

講演者の板垣雄三氏(東大名誉教授)は中東問題の第一人者で、『「対テロ戦争」とイスラーム世界』(岩波新書, 2002)、『イスラーム誤認：衝突から対話へ』(岩波書店, 2003)等の著者として知られる。講演の中で板垣氏は、世界を揺るがすパレスチナ問題と無関係ではないという意識が我が国に欠如していると指摘したうえで、パレスチナ問題と「対テロ戦争」をとらえるための10のスキーマを提示した。

(1) パレスチナ問題は人種・宗教の対立ではなく、領土争いでもない。それは、帝国主義・人種差別・軍国主義 vs. 自由・平和の闘争であり、抑圧 vs. 抵抗の闘争である。

(2) 「対テロ戦争」の言説は、抵抗運動に対して「人類への敵」というレッテルをはる目的で1970年代にイスラエル政府によって生み出された。

(3) 9.11以降、「対テロ戦争」はイスラエル国家を存続させ、イスラームに対する敵意をおおるために利用された。

(4) イスラエル国家は反ユダヤ主義の産物である。

(5) 西洋にとってイスラエル国家は歴史的な負い目をめぐうという存在意義を有する。中東における西洋の戦略的拠点としての存在意義も有する。

(6) ショア(ホロコースト)の問題を強調し、ナクバ(1948年以降にパレスチナ人にふりかかった大惨事)を無視するのは偽善であり、犯罪である。

(7) 現在のパレスチナ人の境遇はかつてユダヤ人が受けた苦難と通ずるものがあり、その意味でパレスチナ人は「ユダヤ人化」していると言える。

(8) アラブ諸国のエリートたちもパレスチナ人を抑圧している。

(9) 「対テロ戦争」を終結させるには、まずパレスチナ問題における不正を正す必要がある。現行の中東和平プロセスと二国併存案には欺瞞がある。

(10) 「対テロ戦争」はかならずや失敗し、敗北し、挫折するが、その背後には、欧米が自らの倫理的債務をご破算にしようとする「自己破産」とも言うべき動きがある。

さらに、日本もこれまでパレスチナ問題に加担してきたこと、また日本にも独自の帝国主義・人種差別・軍国主義の問題があることを指摘することにより、板垣氏はパレスチナ問題をわれわれ自身の問題としてとらえ直す必要性を力強く訴えた。

講演 II : Yakov M. Rabkin モントリオール大学教授 *Jews and Muslims : a Source of Conflict or a Promise of Collaboration?*

引き続き行われたラブキン教授の講演「ユダヤ人とイスラーム教徒：紛争の種か協力への兆しか (*Jews and Muslims: a Source of Conflict or a Promise of Collaboration?*)」では、次の3点が強調された。

(1) ユダヤ人とイスラエル人は明瞭に異なる存在であるが、多くの人々が両者を混同している(ちなみに、ラブキン教授はユダヤ人であるが、イスラエル人ではない)。なお、テルアビブ大学の Shlomo Sand によると通常「ユダヤ人」と一括される “Jews” と “Jewish people” も異なる存在で、後者はユダヤ人国家としてのイスラエルを正当化するために19世紀末に新たに生み出されたという。

(2) シオニズムはユダヤ教の産物ではない。ユダヤ教は特定の空間に縛られない否場 (extraterritorial) の宗教であるため、場に固執する territorial なシオニズムとは根本的に相容れない。シオニズムはユダヤ教に対する反逆であり、伝統的なユダヤ教徒はシオニズムを容認しない。

(3) イスラエルとパレスチナの紛争は政治問題であって、宗教に起因するものではない。イスラーム教徒ユダヤ教徒は友好的に共存することができ、実際にイスラーム教徒の支配下で両者が数世紀にわたって友好的に共存した歴史的事実がある。

ラブキン氏はシオニズムそのものを否定するわけではなく、シオニズムをめぐるさまざまな思い違いや誤解を解くことを目指している。またイスラエル国家の存在を否定するわけではなく、政治的枠組みが何であれ (two states, one state, confederation, etc) ユダヤ教徒とイスラーム教徒の平和的共存を志向している。そのため、彼の主張はユダヤ人が

らもイスラエル人からも好意的に受け止められており、上記の著作のヘブライ語訳が近くイスラエルで出版される予定である（日本語訳も平凡社から近刊予定）。

コメント・質疑応答

講演後、休憩を挟み、津城寛文教授（人文社会科学研究所哲学・思想専攻）、池田潤教授（人文社会科学研究所文芸・言語専攻）から、板垣教授とラブキン教授の講義に対してコメントがあり、活発な討論が展開された。

津城寛文教授のコメント

津城教授は宗教学と日本研究を専門とする立場から、セミナーのタイトルと両講演者の発題に「現代日本から見た終末論」という「周皮的」なコメントがあった。

終末論は日本に自生した考え方ではなく、パレスチナ問題も一般市民には縁遠いものと感じられているが、3つの話題に注目することで、より身近なものとなる。（1）超大国アメリカとの抜き差しならない関係。アメリカはまたイスラエルと抜き差しならない関係にある。（2）サブカルチャーで流通する日猶同祖論（Japano-Israelism）（3）アメリカとイスラエルを中心に政治問題となっているシオニズム。

（1）日本政府の外交はアメリカ政府の管轄化にあり、日本はアメリカの属国であるといった批判がある。極端な政治評論家はそれらの背後に、人間のシナリオである「陰謀」や、神のシナリオに組み込まれた「狂信」を想定する。陰謀論は不愉快なテーマであり、良識的な学者からは無視されるが、陰謀論者が大事件を起こすこと（オクラホマ市爆破事件やオウム真理教サリン事件、その他）をみても、無視して済ませられる問題ではない。

（2）日猶同祖論は、不愉快というより愚かしいテーマであり、良識的な学者からは冷笑されるが、「ナショナリズム」と「人種主義」の世紀に、ユダヤ・キリスト教的な文脈の伝説が、外から日本に持ち込まれたもので、以来、内外に支持者が絶えない。

（3）シオニズムのリスクとコストについて、アメリカの政治学者の精緻な分析があるが、神のシナリオに言及する原理主義者の説得に関しては、リアル・ポリティックスの立場はまったく無力なようである。私見によれば、シオニズムは「公共宗教」の1つの表現であり、「深層文化」を足場として、政治と宗教と文化が相互に動員するさまざまな次元に展開しており、平面的な分析ではカバーできない。

日本はアメリカに、アメリカは内外のシオニズムに悩まされているが、人間のシナリオや神のシナリオが絡んだ陶酔的な終末論の文脈では、理性的な討議ではなく、ファンタスティックな伝説が、最終局面で狂信の解毒剤になるのかもしれない。これはいわば「ファンタジーのポリティックス」である。

ラブキン教授から、「深層文化」の意味に質問があったのに対して、「この用語は日本オリジナルの術語であり、歴史的深層、心理的深層、民俗主義的な深層がある」と説明した。さらに「それは文化決定論か？」との質問があったので、それに対しては、「決定論ではなく、文化拘束性を強調するものである」と答えた。

板垣教授からは、「人間のシナリオ」と「神のシナリオ」の対比について、「自分は基本的にすべて人間のシナリオだと思う。政治と宗教が相互動員するという場合、宗教の動員は、政治にとっては戦略ではないか？」との指摘があった。これに対して津城教授は、「半分はそうであるが、半分はそうではないと思う。宗教的資源を動員する政治は、宗教的な影響を被らざるを得ず、最終的には宗教的原理に従属すると考える」と応えた。

セム系一神教のただ中でシオニズムを研究しておられるラブキン教授と、世界史の中で日本も巻き込んでパレスチナ問題を研究しておられる板垣教授をお迎えして、「公共宗教」論の観点からコメントを準備し、議論ができたことはたいへん有意義であった。

池田潤教授のコメント

引き続き、池田潤教授からは以下の質問がなされ、ラブキン教授からの回答があった。

(1) シオニズムは確かに場に固執するが、イスラエルという特定の場に固執したわけではない。例えば、ユダヤ人国家の候補地としてウガンダや満州が検討された経緯もある。そういう意味で、必ずしも領土主義的 (territorial) とは言えないのではないか？

これに対してラブキン教授からは、シオニズムは一枚岩ではなく、宗教的シオニズム、労働シオニズム、アハド・ハアムのようなシオニズム、リクード党のシオニズムなど、さまざまな立場があり、その中にイスラエルという特定の領土を志向する立場があったのは否定できないという返答があった。

(2) 今日の特別講演のメインテーマ “What is Obstacle of Dialogue and Coexistence?” に立ち返り、両宗教は対話の障害ではないという趣旨の話があったが、ユダヤ人とムスリムの対話を妨げている問題は何なのか。

この問いに関して、ラブキン教授からは、これは政治的な問題だという考えが述べられた。

(3) 中世のイスラム世界では、アラビア語で非常に実り豊かな対話がなされた。現在の占領地では、ヘブライ語で実り多いとはいいがたい対話がなされている。今後、より多くのユダヤ人とムスリムが日常的に対話するには、何語で対話するのが最良だと思われるか。この質問に対して、ラブキン教授は、今日、イスラム教徒もユダヤ教徒もさまざまな言語を使用するので、対話する言語には事欠かないという答えであった。

津城教授、池田教授のコメントと質疑応答の後、フロアーからも質問があった。対話を促進するために、政治家や研究者ではなく、普通の人間に何ができると考えるか。これに対して、ラブキン教授は、非常に重要な質問であり、自分を「普通の人間」だと考えるが、やはり誤解を解くことがいちばん大切だという意見であった。このような場にくること、そしてそれを周りの人たちに伝えること、その積み重ねによって対話が築かれていくという考えが強調された。またアカデミックな場でのユダヤ人問題、シオニズム問題の追究が現実の中東和平問題解決にどのようにつながるか、といったより具体的な質問も出された。それに対してラブキン教授は、直接に政治の場での議論とは異なる立場であると言われた。北アフリカからの留学生も含め、ラブキン教授・板垣教授との間で、予定時間を 1 時間程

度超過しながらも、活発な質疑応答が展開された。

閉会の辞として、青木三郎人文社会科学研究科文芸・言語専攻教授より閉会の辞があり、盛会のうちに第Ⅰ部が終了した。

第Ⅱ部 大学院生との交流会

第Ⅱ部は、大学院生との交流会として、場所を移し、北アフリカ研究センター会議室(共同研究棟 A303-1)で行われた。本学人文社会科学研究科の大学院生3名が研究報告をし、それに対してラブキン教授・板垣教授がコメントする形で研究会が行われた。発表はすべてフランス語で行われ、参加者は10名であった。

宮川宗之氏 「フランコフォニーの周辺」

まず、宮川宗之氏(人文社会科学研究科文芸・言語専攻/IFERIプログラム生)が「フランコフォニーの周辺 (À la périphérie de la francophonie)」という研究を発表した。次に、角田延之氏(人文社会科学研究科歴史・人類学専攻/IFERIプログラム生)「対立の性質：フランス共和主義の考察 (Nature des antagonismes: Recherche sur le républicanisme français)」について発表し、最後に、岡本亮輔氏(人文社会科学研究科哲学・思想専攻/JSPS 特別研究員)が「世俗化と共存可能性 (La Sécularisation et la possibilité de coexistence)」について発表した。

宮川氏は、本セミナー自体のテーマとして”What is Obstacle of Dialogue and Coexistence?”というものが設定されていたため、それを自身の研究テーマであるアフリカのフランコフォニーに引きつけて発表することとした。具体的には仏語圏(フランコフォニー)という概念の変遷について述べ、また現在しばしば主張される所の「文化・言語の多様性の保存」という概念が、その周辺部においては実際にいかに機能しているか、あるいはしていないかと言った点をひとつの問題として提起することを目的とした。対話と共生というある意味普遍的な問題に対して、言語による分断、時に対話の困難さといった局面から何らかの具体的情報を示すことで、また新たな対話が生まれることを期待してのことである。ラブキン教授からは、確かに現在のフランコフォニー国際組織には、実際にはフランス語圏とは言い難い国々も多く加盟しており、それが大変興味深いこと、また対話や共生と言った観点からも英語圏との関わり、拮抗の仕方等は問題になるわけであり、英語圏にも存在する国際組織(コモンウェルス)との比較検討等は役に立つであろうとのご指摘をいただいた。またちなみに本セミナー第Ⅰ部での共通言語は英語であったが、宮川氏の研究テーマがフランス語圏であり、かつラブキン教授ご自身がマルチリンガルであったこともあって、発表はフランス語で行われた。これもある意味、対話について何らかの考察を呼ぶものであったように思う。

角田延之氏 「対立の性質 フランス共和主義の考察」

つづいて角田氏は “Nature des antagonismes –Recherche sur le républicanisme français” (対立の性質 フランス共和主義の考察)というタイトルの発表を行った。使用言語はフランス語である。角田氏は専門であるフランス革命史研究の立場から、本セミナーにおける重要テーマである「対話と共存と妨げるものは何か」および「シオニズムをどう解釈するか」という点に着目して、ユダヤ系フランス人の識者が、現在、フランスの論壇で起こしている問題を取り上げ、発表した。内容は要約すると以下のようになる。

フランス共和主義は、民族や人種といった自然の参照基準に依拠しない諸個人による国家建設を支持する概念である。だがユダヤ系フランス人の識者 A・フィンケルクロートは、フランス共和主義の支持者でありながら、イスラエルの国家政策を支持し、フランス国内のイスラム教徒やマグレブ系住民を非難し続けている。フィンケルクロートは 2005 年の郊外暴動もアフリカ系、北アフリカ系住民の仕業であるとしているのである。人類学者として著名な E・トッドは、フィンケルクロートがユダヤ系であるがゆえにこのような発言を許されたのだらうとコメントしている。私には、トッドのコメントは正しく思われるが、トッドもまたユダヤ系であり、このコメントはそれゆえにこそ許されたように思われる。このように、民族や人種による差異を認めないはずのフランス共和主義の中で、実際にはユダヤ人であるがゆえの、一種の地位の特権化が行われている。もともと共和主義はフランス革命期、特に、危機の時代に要請された概念であり、強固な国民統合の要請と結びついていた。それゆえ、統合の要請に従わない人間を排除するメカニズムを当初から有しており、それが後の恐怖政治に繋がった。このように見てみると、共和主義は、シオニズムやナショナリズムと結びつくときそれらの排除原理を促進させるため、危険な概念であるといえる。共和主義は内部における差異を許さず、それゆえシオニズムもナショナリズムも存在しない建前なので、問題が見えづらくなっており、解決が阻まれている。今後のフランス共和主義復権のためには、ユダヤ系住民を受け入れると同時にイスラム教徒やアフリカ系住民も受け入れる社会を作ることが必要となる。この発表について、ラブキン教授からは大変興味深い、とのコメントをいただいた。

岡本亮輔氏 「世俗化と共存可能性」

最後に岡本氏からは、現代フランス社会を事例として、ポスト世俗化状況にある近代社会における制度宗教の様態についての報告があった。フランスにおけるライシテ、カトリック、イスラームの三者の関係性とそれぞれの社会的位相をめぐる考察は、近代国家とイスラームという宗教と近代性の問題、さらにはカトリックとイスラームという宗教間の関係性や共存可能性を考える手がかりになるものと思われる。

フランスの世俗化を考える際にキーワードとなるのが公共空間の非宗教性を意味する「ライシテ (laïcité)」である。フランスでは大革命以降、ライシテ原則の名の下に公教育や政治といった公共空間からカトリックの影響力が積極的に排除されてきた。実際、20 世紀

後半以降、教会出席率や聖職志願者数は西欧でも最低レベルになっており、その意味で、フランスはもっとも端的に世俗化を経過した社会だといえる。ライシテ原則に基づくフランス流の政教分離は、米国などと比べると極めて厳格な分離モデルとしてしばしば言及されてきた。そして、移民の統合問題については、ライシテという近代的中立性の観点から英米式の多文化主義は強く批判され、「個人の統合」が主張されるのである。その結果、現代のフランスの移民についての議論は、フランス社会側のあり方がライシテ原則という近代性によって代表されるという特徴をもち、とりわけ移民をめぐる政治的言説においては、ライシテのフランス/イスラームの移民の相克という素朴な対立図式に基づく立論が頻繁にみられるのである。

しかし実際には、イスラーム以外の移民、とりわけカトリックの背景をもつイタリア・ポルトガルからの移民や、1980年代に展開したバスク地方・ブルターニュ地方における国内の少数文化の承認運動などは遥かに寛容に受容された。特に後者の場合、文化的な差異は「国内文化の豊かさ」として好意的に位置づけられるのである。

こうした非対照的な対応の背後には、「深層文化 (Deep Culture)」「公共宗教」として伏在するカトリックの影響があるものと思われる。G・デヴィ「身代わりの教会出席者」、R・チプリアーニ「価値観として拡散した宗教」、R・J・カンピシュ「宗教のザッピング」、D・エルヴェ＝レジェ「諸価値のエキュメニズム」といった修正派世俗化論者たちの一連の概念は、近代社会においても社会学的可視性の低い仕方で作動し続けるかつての支配的宗教のあり方に光を当てるものである。これらの観点からは、ライシテとカトリックは一種の共犯関係にあるものとして理解できる。そしてその意味では、マグレブ系移民たちが要請されるイスラームのライシテへの適応とは、本質的には、イスラームのカトリック化をも教唆するものに他ならず、本発表ではそれを「カトリック的ライシテ化 (catho-laïciser)」として結論づけた。

この発表に関して、ラブキン教授からは、「深層文化」としての支配宗教の沈潜と持続という論点は、講演会の質疑応答における津城寛文教授との議論と極めて近いという指摘があった。また、フランスのスカーフ論争に対して、カナダのキルパン論争の事例をあげ、フランスのライシテは極めて特殊なものであり、ある種の宗教としても捉えられるというコメントがあった。

第 I 部も第 II 部も活発な討論・意見交換が行われ、英語・フランス語を駆使しながらのラブキン教授・板垣名誉教授を囲んでの熱のこもった交流会となった。

交流会の後は塩尻副学長、中嶋光敏北アフリカ研究センター長も合流されて、アットホームな食事会となり、談笑のうち、7時30分に閉会となった。

(文責 青木三郎)